

KIITO:

〈災間スタディーズ：震災30年目の“分有”をさぐる〉 #3 ワークショップ「まちの記憶をなぞり、歩く」

神戸市の都市戦略「デザイン都市・神戸」の拠点施設である「デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)」では、社会貢献活動の活性化や創造性を育むさまざまな活動に取り組んでいます。この取り組みの一環として、次のとおりトークイベントを開催いたします。



災厄をめぐって、アートやアーカイブの視点からリサーチを行うゲストを迎え、渦中に生きる人びとが生み出す記録や表現の力について考える、デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) と災間文化研究会によるプロジェクト「災間スタディーズ」。この度、シリーズの第3回目として、#3 ワークショップ「まちの記憶をなぞり、歩く」を開催する運びとなりました。第3回は、「歩く」という素朴な行為のなかにある「動き続けること、感覚が開くこと」に興味を持ち、さまざまな人々と歩行の実践をしてきた古川友紀さん（ダンサー、散歩家）をゲストにお迎えします。古川さんは、2018年、阪神・淡路大震災に関する演劇への参加をきっかけに、神戸のまちの記憶を歩いてなぞる「おもしろワークショップ」を始めました。ワークショップでは、古川さんをナビゲーターに「おもしろワークショップ 2024 ver.」を実施します。身体を動かし、地形をたどる。土地の記憶につながるテキストを読み、それを声に出し、過去の出来事に思いを馳せる。ゆっくりと時間をかけて、まちを歩くことから、自分とは異なる誰かの記憶にアプローチしてみましょう。

事業名：〈災間スタディーズ：震災30年目の“分有”をさぐる〉 #3 ワークショップ「まちの記憶をなぞり、歩く」

日時：2024年11月23日（土）10:00-18:00（予定） ※ 小雨決行・荒天中止

会場：神戸市内 ※詳細はウェブサイトでお知らせします。

参加費：1000円（資料代込）

持ち物：石一つ

定員：7名（要事前申込、申込多数の場合は抽選）

申込：2024年10月1日（火）より申し込み受付開始。ウェブサイト（<https://kiito.jp/>）よりお申し込みください。

ナビゲーター：古川友紀（ダンサー、散歩家）

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、災間文化研究会

【ゲストプロフィール】



古川友紀 ダンサー、散歩家

1987年、京都府生まれ。歩くという素朴な行為のなかにある運動の持続と世界の受けとめ方に関心を持ち、歩行にかかわるいろいろな企画をしている。複数の人と目的地を決めずに歩き、その歩行の軌跡を一本の線で地図に描く「即興散歩 アルコテンポの会」、小石を携えてまちを歩き、その地の記憶につながる文章を読んだり、地形を身体でなぞる「おもしろワークショップ」、歩く感覚をさまざまなメディアにうつしとる「歩録」シリーズなど。また、ダンサーとして、佐久間新や Ensemble Sonne、レジーヌ・ショピノの作品等に出演。自作の上演も行なっている。



写真：過去のワークショップの様子

【災間スタディーズ：震災30年目の“分有”をさぐる】

災間の社会を生き抜く術として、災厄の経験を分有するための表現の可能性をさぐるリサーチプロジェクト。「災間」「分有」という2つのキーワードを軸に、阪神・淡路大震災から30年を迎えようとする2025年に向け、震災を経験した地で行われた活動と、それによって生まれた記録や表現に光をあて、さまざまなリサーチやプログラムを通して、継承の糸口をさぐる。

【災間文化研究会】

さまざまな災厄の間（あいだ／なか）を生きているという「災間（さいかん）」の視点に立ち、社会を生き抜く術としての文化的な営みに目を凝らし、耳を傾ける試みを行うグループ。2021年に実施したTokyo Art Research Lab「災間の社会を生きる術（すべ／アート）を探る 災害復興へのいくつもの「かかわり」から」でのディスカッションをきっかけに活動を開始。メンバーは佐藤李青（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）、高森順子（情報科学芸術大学院大学 研究員、阪神大震災を記録しつづける会）、宮本匠（大阪大学大学院人間科学研究科 准教授）、小川智紀（認定NPO法人STスポット横浜 理事長）、田中真実（認定NPO法人STスポット横浜 事務局長）。それぞれ異なるテーマをもって活動し、災間の社会における“間”で動くメディアとしてのふるまいを模索している。2023年5月、記憶を〈分有〉する表現にまつわるメールマガジン「分有通信」発行。bun-tsu編集部には編集者の辻並麻由が参加。

【阪神大震災を記録しつづける会】

阪神・淡路大震災の体験手記を集め、出版する市民団体。阪神・淡路大震災の約1ヶ月後の1995年2月中旬より、神戸で印刷業を営んでいた高森一徳を发起人として活動をはじめ。同会の最初の活動は「震災にかかわったすべての人」を対象に、「原稿用紙5枚程度の自作未発表の体験記、および関係写真」の募集であった。募集ポスターは韓国語、中国語、英語にも翻訳され、外国にルートをもつ人びとからの手記が広く寄せられることも目指された。1995年5月に最初の手記集『阪神大震災 被災した私たちの記録』を出版。手記集の出版は、約1年に1度のペースでおおよそ10年にわたって続いた。10巻までの投稿総数は1,134編。10巻の脱稿後の2004年12月に一徳が急逝し、約5年間の活動休止を経て、2010年に一徳の姪である高森順子が事務局長となり活動を再開した。震災から20年目の2015年には10年ぶりの手記集を出版。25年目の2020年には、これまでの執筆者へのインタビューを収録した記録集を出版し、現在まで活動を続けている。